【総合防災訓練から（道路啓開・負傷者搬送訓練）】…災害発生時、道路には倒木、ブロック塀などが散乱し、救急車や消防車などが入れない可能性がある。そのとき負傷者の救助や搬送の役を担うのは住民たちであり、道路上の障害物を取り除く作業も住民自らする必要がある。孤立化の不安がある本町では非常に重要な訓練。写真は横だおしとなったブロック塀をジャッキで取り除こうとする自主防会員。

災害は「想定」できない

いわゆる大規模災害と呼ばれるものには台風、集中豪雨、地震、噴火などがある。その内、台風についてはある程度の進路や到達日時が予測され、該当する地域は備えを始めたり、避難を進めたりすることができる。ある程度、心構えをしておくことが可能だろう。

では地震の場合はどうだろうか。ある日突然大きな揺れに襲われる。真夜中か、昼間か、平日か、休日か、晴れた日か土砂降りの日か、あるいは産業文化祭のような人がごった返した中で起こる可能性だってある。いつ、どのような形で起こるか分からないのが地震だ。

県ではこれまで東海地震の発生に備えハード面の整備に力を入れてきた。TOUKAI―0などの制度の充実が図られ、防災計画が策定され、東海地震を想定した防災訓練なども盛んに実施されてきた。特に自主防災会の組織率は全国に誇れるほどといっていいだろう。

津波てんでんこという教訓

右ページの小さな写真は宮城県南三陸町で撮影した一枚だ。この三陸地方には昔から伝わる教えがある。「津波てんでんこ」という。てんでんことは「てんでんばらばら」を意味する方言。津波が来ると思ったら、親や子に構わず一人でひたすら逃げ延びろ、そうして一家全滅を防げという意味だ。薄情な教えだと思う人もいるかもしれない。が、ここには地震や津波がいかに恐ろしいものか、身をもって体験した人たちの「実感」が込められている。

たびたび甚大な津波に襲われてきた三陸地方では、身内を助けようとして逃げ遅れ、犠牲になった人が非常に多いという。津波被害は一分一秒を争う。生きるか死ぬかの瀬戸際なのだ。悲しい教訓ではあるが、裏を返せば、古くから防災意識が非常に高いという証明でもある。

防災対策の落とし穴

東海地震の発生が叫ばれて久しい静岡県。長年にわたって地震研究が進められ、それに基づいた対策が図られてきた。しかしここに落とし穴がある。行政がどれだけ頭をひねっても「人の意識」にまでは対策が立てられないということだ。

東日本大震災に襲われたある地域では、ハザードマップに記された危険区域のすぐ外側に犠牲者が多かったというデータがある。

「うちは危険区域から外れている。だから大丈夫だろう」と、ハザードマップの想定を過信したゆえの悲しい現実といえる。

防災対策は、一人一人の意識から始まる。何も起きていない今だからこそ「わが家の防災対策」を進めたい。非常食や飲料水などの準備、家具の転倒防止・家屋の耐震化といった備えだけではなく、家族の連絡手段、避難場所の確認といった心の準備まで、すべきことはいくらでもある。

大自然の懐に抱かれ、その恵みを受ける川根本町。しかし逆の見方をすれば、常に大自然の脅威にさらされている町ということでもある。決して災害に強い町ではない。でも、住民一人一人が防災意識を持ち、自ら備え、行動に移すことができたら、今より災害に強い町になれる。

それが大自然と共に生きる町ならではの防災スタンダード。

川根本町が災害に立ち向かうための「最良の備え」だ。

明日への防災　終

▲南三陸町で撮影した写真。漠然と広がる平地にぽつんと一つお椀が転がっていた。もとからあったものか、どこかから流れ着いたものか…。今は何もない荒涼とした平地。でもここには「人々の温かな暮らし」が存在していた。当たり前のように笑顔を交わす人々がいた。そんなことを思い起こさせるような悲しい光景だった。